

平成 30 年 9 月 10 日現在

機関番号：22702

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25293443

研究課題名(和文) 東北のがん看護認定看護師が支援するがん患者サポートとしての「筆記療法」の効果

研究課題名(英文) Effect of nursing intervention using expressive writing method in patients with cancer by certified nurse working at Tohoku in Japan

研究代表者

織井 優貴子 (Yukiko, Orii)

神奈川県立保健福祉大学・保健福祉学部・教授

研究者番号：50285681

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、"expressive Writing Method" (筆記療法)を用いて、癌患者に介入し、ストレスフルな体験を記述することで、がん患者の健康状態やQOLの維持向上に有用であるかどうかを検証することである。無作為対照化試験は、2015年10月から2018年3月まで実施した。その結果、介入群では介入後4ヶ月後のストレス指標は有意義に改善されたが ($p < 0.05$, Wilcoxon) 対照群では変化はみられなかった。介入群は、1年経過後もストレスの改善が見られた ($p < 0.05$, Wilcoxon)。また、介入1年後の健康関連QOLは、介入群の健康関連QOL (SF-36) は改善された。

研究成果の概要(英文)：To determine if writing about stressful life experiences affects disease status in patients with cancer using standardized quantitative outcome measures. Research has demonstrated that expressive writing about emotionally traumatic experiences has a surprisingly beneficial effect on symptom reports, well-being, and health care use in healthy individuals. Randomized controlled trial conducted between October 2015 and March 2018.

Invaluable patients 4 months after treatment, cancer patients in the experimental group showed improvements in stress activity ($p < 0.05$, Wilcoxon). Control group patients showed no change or worse. The experimental group showed improvements in stress after one year treatment ($p < 0.05$, Wilcoxon test). 1 year after treatment health-related QOL (SF-36) was improved in the experimental patients group but control group patients health-related QOL showed worse after treatment.

研究分野：がん看護、がんリハビリテーション

キーワード： expressive writing ストレス だ液アミラーゼ測定 健康関連QOL評価 ファシリテータ育成 carin
g がん患者サポート

1. 研究開始当初の背景

(1) がん対策基本法からみたがん患者相談支援の現状

東北地方は、がんによる死亡者数が上位を占めている(平成21年人口動態統計)。その中でも青森県は、がん死亡者数が全国第1位であるにも関わらず、がん患者のサポートに対する行政の取り組みはなされていない。平成22年1月に青森県で行われた「がん対策に関するタウンミーティング」では、がん患者から心理的サポートの必要性について切望された。

平成19年6月に「がん対策推進基本計画」が示され、国・地方公共団体および関係者等が、がん対策を総合的かつ計画的に推進していく必要性が示されている。平成24年6月の「がん対策推進基本計画」では、がん医療に関する患者の相談支援および情報提供の必要性が示されている一方で相談支援体制の差が指摘され、その体制の構築が課題であるとされている。これらに対して、国・地方公共団体・拠点病院レベルでの情報共有や協力体制の構築が取り組むべき施策となっているが、具体的な示唆は得られていない。

(2) がん患者への心理的サポートがQOLに及ぼす効果

同種造血幹細胞移植(Hematopoietic Stem Cell Transplantation, 以下 HSCT)を受けた患者の退院後の困難は、「病気の不確実性」「今までと違う体力」「身体的変化」「周囲への気兼ね」「変化した生活の辛さ」が報告されている¹⁾。また、移植後のボディイメージは、「脆弱さ」「コントロール感覚が持てない」という特徴が挙げられる²⁾。同患者の健康関連QOL(SF-36)は、移植後36か月まで全体的に低い傾向にあり、特に移植後12~24か月では「身体機能」「日常役割機能の身体」「活力」「社会生活機能」が国民標準値より有意に低下していた³⁾。

乳がん患者に対する心理的サポートをおこなった研究では⁴⁾、「コミュニケーションスキル」を用いて、看護師のコミュニケーションスキルをトレーニングし、トレーニングを受けた看護師の心理介入がトレーニングを受けなかった看護師による介入よりも、患者のQOLが有意に高く維持されたことが示された。

(3) 心理的看護介入としての「筆記療法」のQOL及び自己効力感の改善に対する効果

心理的看護介入として、認知行動療法的介入の一つである「筆記療法」は、効果的かつ安価な治療として期待されている^{5,6)}。「筆記療法」は Pennebaker、F. Smyth ら⁵⁾によって開発され、安価な行動医学的かつ心理的治療法、自己開示抑制の除去、セルフ・ヘルプという特徴がある⁶⁾。我々は、大腸がん患者に対し、ストレスフルな体験を記載す「Writing(筆記療法)」を用いて介入したところNK活性が上昇し「Writing」の有効性を示唆した⁵⁾。乳がん患者を対象とした筆記療法の研究では⁷⁾、身体面・心理面の健康が介入後3か月にわたって改善したと報告されている。また、Low ら⁸⁾による乳がん患者への研究でも、陰性感情言語の使用が多いほど身体症状の減退がみられるといった効果が示されている。

(4) 「筆記療法」の感情抑圧の改善に対する効果

がん患者は自己の感情を抑圧し、感情表出しないといった特徴的な性格傾向(Type-C)がみられることが明らかになっている(Eysenck, Temoshok, et al)。我々は、Eysenck らが作成した Short Interpersonal Reactions Inventory(SIRI)の日本語版を作成し、本邦において肺がん患者、大腸がん患者の性格傾向を SIRI 日本語短縮版で測定したところ、感情抑圧傾向があることが示唆された。これらに対し、「筆記療法」は、ストレスフルな体験を短時間で記載することで

大きな浄化作用があることが注目されている療法である (Smyth, et al)⁵⁾。

(5) 東北地区のがん認定看護師・専門看護師の充足率

都市部においては、比較的容易に様々な研修会を継続的に受けられるが、地方都市群においては、そのことは容易ではない。また、がん専門看護師、緩和ケア認定看護師など、がん看護に関連した認定看護師の東北におけるその割合は全国の10%程度であり、がん診療拠点病院においてもそれらの教育を受けた看護師が十分に配属されているわけではない。

2. 研究の目的

本研究では、東北地区のがん看護に関連する認定看護師、専門看護師を中心としたがん患者サポートグループを立ち上げ「筆記療法」を主体とした通院中のがん患者サポートとして関わるファシリテータの育成と、地域連携型の「がん患者サポートネットワーク」を構築することを目的とした。具体的には、「筆記療法」を主体とした研修を受けたファシリテータが、通院しながら治療を受けているがん患者に対して「筆記療法」を用いて介入し、QOL・自己効力感への長期的な効果を検証すると共に、「がん患者サポートネットワーク」を通して東北地区のがん看護およびがん医療の質の向上を目指した。

3. 研究の方法

東北地区で「筆記療法」を用いた看護支援プログラムのファシリテータ養成セミナーを開催し同時に、「筆記療法」に参加する研究協力者を募った。

その後、東北地区のがん診療連携拠点病院および、がん看護に係る認定看護師、専門看護師の勤務する病院に協力を求め、協力の得られたがん患者に対し「筆記療法」を用いた無作為比較試験を実施した。「筆記療法」

は、初回の面接後1週間に、3日間連続して20分間ストレスを想起して記述するという介入であり、面接および効果測定は、ベースライン時(初回)、4週間後、3か月後、6か月後の計4回実施した。

その後、得られた結果をもとに、「がん患者に対する「筆記療法」看護支援プログラム」の有用性を検討した。

4. 研究成果

(1) 研究協力施設の選定と研究協力依頼
東北地区のがん診療連携拠点病院および平成26年度に実施した『がん患者サポートのためのファシリテータ養成講座』アドバンストコースに参加した看護師の勤務する医療施設53施設を対象に、本研究への参加協力を依頼した。

(2) 東北における「地域開放型 がん患者のサポートグループ」のニーズ調査結果をまとめた。本調査では、東北地区のがん診療拠点病院に通院する患者を対象に、がん患者の抱える悩みごとを、身体的側面、精神・心理的側面、社会的側面について、「医師」「看護師」「家族」「友人」「同じ病気を抱えている人」の誰に一番に相談したいと考えているかを調査した。その結果、身体的側面、精神・心理的側面共に乳第1位は医師であり、次は家族に相談したい、という結果となった。本調査で、「看護師」「医療相談室等の窓口」で相談したいと考えている人はごく少数であり、相談室の充実を図る国の方針と、患者の意思は異なる結果となった。

3. がん看護における「ケアリング」行動を測定する指標の日本語版の作成を試みた。日本におけるがん患者のケアでの「ケアリング」の考え方について国外とは異なったケアリングの構成概念があることが示唆された。

<引用・参考文献>

【文献】

- 1) 石田和子, 荻原薫, 石田順子 他: 造血幹細胞移植患者が退院後に遭遇する困難と移植後の生活を再構築できる要因, 北関東医学雑誌 55, 97-104, 2006
- 2) 平田芳子, 藤田佐和, 鈴木志津枝: 造血幹細胞移植後に慢性 GVHD を発症した患者のボディ・イメージ, 高知女子大学看護学会誌 34 (1), 36-43, 2009
- 3) 大槻久美: 造血幹細胞移植を受けた成人患者の QOL - 継時的な変化の検討 - . がん看護 12 (1), 89-93, 2007
- 4) Fukui S, Ogawa K, Ohtsuka M, et al: A Randomized Study Assessing the Efficacy of Communication Skill Training on Patients' Psychologic Distress and Coping -Nurses' Communication With Patients Just After Being Diagnosed With Cancer. Cancer 113:1462-70, 2008
- 5) 織井優貴子: 大腸がん患者の免疫能と QOL に対する「writing」を用いた看護介入の効果. 日本がん看護学会誌 20 (1), 19-25, 2006
- 6) 安芸かおり: がん患者に対する認知行動療法的介入 筆記表現の文学的検討, 日本保健医療行動科学学会年報 24, 134-149, 2009
- 7) Henry EA, Schlegel RJ, Tally AE, et al: The feasibility and effectiveness of experience writing for rural and urban breast cancer survivors, Oncol Nurs Form 37(6), 749-757, 2010
- 8) Low CA, Stanton AL, Danoff-Burg S: Expressive disclosure and benefit finding among breast cancer patients: mechanisms for positive health effects, Health Psychol 25(2), 181-189, 2006
- 9) 辻弘美, 川上正浩: アミラーゼ活性に基づく簡易ストレス測定器を用いたストレス測定と主観的ストレス反応測定との関連性の検討, The Human Science Research

Bulletin 6, 63-73, 2007

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 9 件)

がん化学療法看護認定看護師が試みたがん患者サポートとしての「筆記療法」の効果と課題, 第 32 回日本がん看護学会学術集会, 2018

Effect of nursing intervention using “expressive writing method” on immune function and quality of life in patients with cancer, International Conference on Cancer Nursing ICCN 2018(国際学会), 2018, New Zealand

Yukiko Orii: A Trial of developing the Japanese brief version of the caring assessment report evaluation Q-SORT (CARE-Q): To measure the Oncology nursing caring behavior, European Society for Medical Oncology - ESMO Asia 2017 Congress (国際学会), 2017, Singapore

The Evaluation of the Japanese (Mizuno) Version of the Caring Assessment Report Evaluation Q-sort (CARE-Q), 2nd Report, International Association for Human caring Conference, (国際学会), 2016, New Orleans, USA

Yukiko Orii: The Present State and The Problem of The Offering Nursing Cares for Family Members of The End of Cancer patients in General Hospitals in Japan, European Society for Medical Oncology (国際学会), 2016, Singapore

Yukiko Orii: The Evaluation of the Japanese Version of the Caring Assessment Report Evaluation Q-sort (CARE-Q) for Oncology Nurse,

International Conference on Cancer
Nursing (国際学会), 2016, Vancouver,
Canada

Yukiko Orii: A Trial of Developing the
Japanese Brief Version of the Caring
Assessment Report evaluation Q sort
(Care-Q), International Conference in
Cancer Care Nursing, 2014, Panama

Yukiko Orii : A Trial of Developing the
Japanese Brief Version of the Caring
Assessment Report evaluation Qsort
(Care-Q) :To Measure the Nursing Caring
Behavioral, International Association for
Human Caring, 2014, Kyoto

織井優貴子 : The Caring Assessment
Report Evaluation Q-sort (Care-Q)日本語版
作成の試み, 第15回日本赤十字看護学会
学術集会, 2014

〔図書〕(計1件)

青木智子編著 織井優貴子 他:医療と健康
のための心理学、2018 北樹出版 193p

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

織井優貴子 (ORII Yukiko)

神奈川県立保健福祉大学・保健福祉学部・教授

研究者番号: 50285681

(2)研究分担者

藤田あけみ (FUJITA Akemi)

弘前大学・医学部・保健学科・准教授

研究者番号: 30347182

梶原睦子 (KAJIWARA Mutsuko)

千葉科学大学・看護学部・教授

研究者番号: 10294802

渡邊 知子 (WATANABE Tomoko)

元秋田大学・医学部・保健学科・講師

研究者番号: 20347199

長内志津子 (OSANAI Shiduko)

青森県立保健大学・健康科学部・講師

研究者番号: 70458165

(4)研究協力者

小清水浩子 (KOSHIMIZU Hiroko)

目時伸俊 (METOKI Nobutoshi)

嵯峨 千春 (SAGA Chiharu)

黒河内 仙奈 (KUROKOUCHI Kana)